焼跡に働く仲間達

日曜も返上し、あと片づけ

前号で既報のように、去る六日大牟田市馬場町の川上信義さん方の火災で、自から消火につとめていた川上さん（本所支部経理）が焼死するという不幸が突発した。同僚の死を悼んだ職場の仲間たちや地域の分会員、主婦たちがそれから二日後の日曜日、同家の焼跡に立つてせつせと跡片づけに汗を流す光景がみられた。春闘のさ中これは美しい仲間たちの姿でる同志愛であろう。

五十数名が参加

突然の不幸に見舞われた川上さん方の家族の人たちは、ただ、一時はぼう然となるありさまだつた。だが跡片づけなど悲しみに浸る暇もない現実である。執行部でもこのことを取上げ、組合の方で考えようということになり、いろいろ話合つたが、とくにこの種仕事にはお手のものの建設の委員の人たちが応援することとなり、また川上さんの職場である経理（五分会）の人たちや、出身地域である駅馬北分会の分会員や主婦たちが折角の日曜のプランをも打捨てて、この計画に参加することとなつた。総員五十数名、役職の人たちはそれぞれ腕章をつけ、午前八時に集合。塚元支部長を先頭に立て、せつせと取壊し作業にとりかかつたのである。

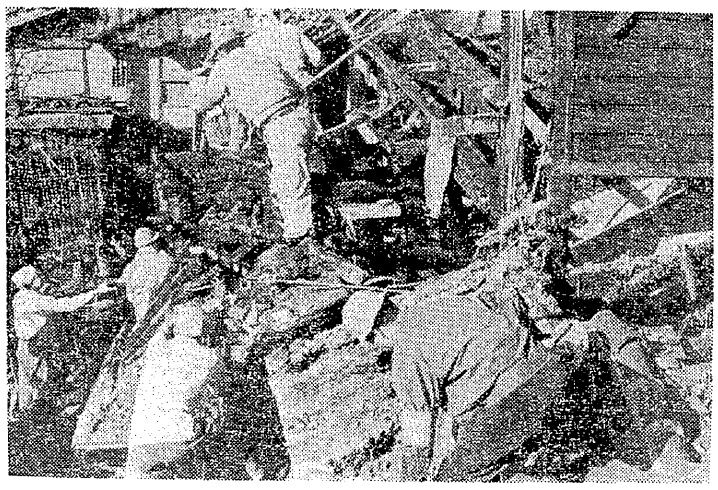
仕事は急ピッチにすすめられていつた。すでに地域の方でも跡片づけの計画が立てられていて、一週間ぐらいの予定が立てられていたのだつたが、ワッショイワッショイとかけ声も元気よく、またたく間に仕事は進み、この日の午後四時ごろには殆んど仕事は終了してしまつた。

この激しい仕事のため、四、五日経つてもまだ足腰が痛むといつている人があるほどである。家族の人たちを救うというよりも、同じ労働者としてできる範囲内の援助や見舞をやつて行こうというのが執行部をはじめ、職場や地域の人たちの気持であつた。

この思わぬ援助に家族の人たちは涙を流さんばかりに感激して喜びに浸つていた。

職場カンパも

一方、十二日の支部委員会でもこの川上さんの取扱いが取上げられカンパ運動をすすめることになつた。このためカンパ帳が用意され支部の各職場を廻されることになり十四日に集約、十七日ごろに家族の人たちに届けられることになつている。このカンパも、家族の人たちにたいしてどうこうするということではなく、あくまでも同じ労働者としての援助、見舞をしようという気持からということである。



跡片づけに餘念のない職場や地域の人たち

お小遣い

「お母さん、紙芝居がきたからお金ください」毎日夕方になるとこの時刻は子供たちにはもう日課になつているような一刻です。

めつたに映画などにも連れていかないので、この紙芝居は子供たちには楽しみの一つになつているのです。

しかし長女を頭に遊びざかりの二男一女の紙芝居代でも、一カ月に計算すると五百円近い金額になり馬鹿になりません。

紙芝居だけならまだしも、この外にも小遣いはありますし、よつぽど主婦も考えて子供たちに金を与えないと、少からぬ金額になるのです。

いよいよストに入りました。こんどの闘いはなかなか難しく長期ストになるそうです。そうなればよつぽど生活を切りつめて、我慢をした生活をしなければ、家庭はめちゃくちゃになつて、お手上げになることでしよう。

だけどストがどんなに長くかかりましようとも、いまの給料を少しでも上げてもらわないことには、私のうちのように坑外勤務者の家庭は、につちもさつちも行かない状態です。

賃上げが少しでもいい条件で勝ちとれるよう、私たちは歯を喰いしばつてでも堪えなければなりません。

大人の私たちはもちろん、可愛いい子供たちにも協力してもらわなければなりません。

三回のお小遣いは一回にでもして、また三人の紙芝居代も何とか話をして言い聞かせ、一人分か二人分かで切りつめさせても頑張らなければ…。

だが大人たちのため子供の夢はこわしてはいけないと心しています。

（外来一主婦）

主婦も劇団員に

「わかくさ」演劇サークル

四山支部駅通分会では、来る二十三日地域文化祭を行うことになつているが、さいきん同分会内に誕生した劇団「わかくさ」は、文化祭の初公演を目指して、いま最後の仕上げに懸命になつているが、主婦が劇団メンバーの約半数を占めているという特異な劇団だけにその成果に興味がもたれている。

「わかくさ」が誕生したのは昨年末である。この分会ではサークル活動が盛んでいろんな分野でサークルが結成されているが、この劇団も演劇サークルとして誕生したものである。

現在劇団員は男子七名、主婦六名の十三名で、リーダーは竹田楳吉さん（四山鉱保安）である。

主婦の参加は最初は危ぶまれており、二、三名が加わつたがそれも所ごみするありさまで、心配されていたが、本読み、立稽古など回を重ねて行くうちに、今では逆に稽古日に稽古が遅れるときなどは主婦の方から早くしてくれという積極さに変つている有様であるという。

いま一番大きな悩みは、矢張り三交替の関係からみんなが一緒に集る機会が少いことである。だから一番時間に都合のつく一番方の帰りと、三番方の出勤前の午後六時から八時ごろまでが稽古時間にあてられることが多い。こんど公演するのは主婦会をバックにしたもので「家庭の危機と組織の危機」というもの。これは主婦として、組織人であるべきか、よりよき妻であるべきかの問題を取扱つているもので、主婦会のため家庭がおろそかになることがいま悩みとなつているが、それを表現しようというものである。

「わかくさ」としては、こんど日常自分たちがやつていることをやろうという、身近かなものを演劇として取上げることに重点をおいている。

まず二十三日の文化祭初公演がどうなるかが、大きな要素をもつているが、それだけにみんな真剣である。公演終了後は懇談会を持つてお互いに批判しようという計画もたてられている。また年に一回秋の発表会も計画されているほどで「わかくさ」劇団のこんごの発展が地域では大きな期待となつている。

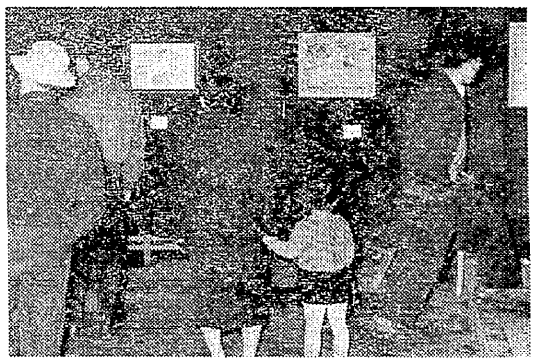
全員が腕章姿で

物資・病院の分会員

本所支部の物資課、病院では特殊な業務のため、スト中も保安要員として平常通り勤務するが、勤務中は闘争意識を高めるため、新たに腕章をつくり、これを腕にはめて業務をつづけることとなつた。

まず、物資課では、各職場に分会旗を掲げることは勿論、毎朝八時に労働歌を合唱して仕事につくことにきめた。とくに自弁で腕章を作製して全員これをはめることになつたが、同腕章は白地に団結と黒で染めぬき、中央に赤で三鉱労組のマークをあしらえたもの。

病院でもこの型の腕章に真中に赤十字を染めぬいたものを着用することにしている。とにかく両職場の人たちは毎日組合員、家族の人たちと接触する仕事だけに、組合員や家族の人たちに闘いに対する認識をしてもらうとともに、また自分自身も保安要員として出ているからといつてややもすれば気が緩みそうになりがちなため、気分を引きしめてお互いに認識と理解を深めて行こうというものである。



こんなに部厚く

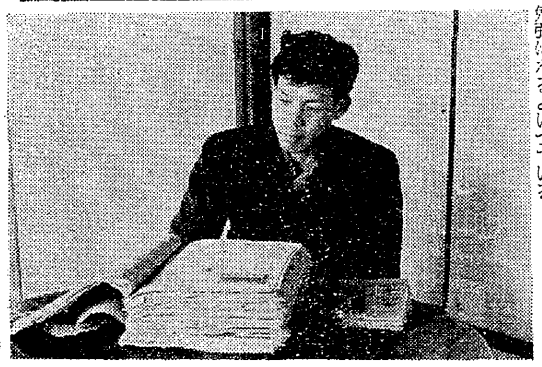
末松さんとみいけ綴り

「みいけ」も本号で誕生以来五一七号の発行を数えるに至つた。

緑ガ丘楓町の末松弘さん（三川・斜坑部内）は炭婦協結成前後から本紙を母念につづりはじめたのがいまでは早くも部厚いつづりになつており、地域分会内で以前の出来ごとや、調査をやるとき是非偲して下さいとあちこちから声がかかるほどである。

ここ緑ガ丘は機関紙も地域で配布するため、とくに紛失する点は少いが、それでもいまでは奥さんや子供たちが、本人以上に心がけていて、普通の商業新聞とはハツキリと区別し「これはお父さんが見るのだから」と丁寧に取扱つているぐらいである。

それでも長い期間中には配布していてどうしても枚数が足らなかつたときがある。そういうときには三番方の帰りなど組合へ寄つて貰つてくるという心の配りようだ。部厚いつづりをめくりながら末松さんは一層重なるものですよ。こうしてつづつて後でみると大変教えられます。とくに尊い組合費の中から作られたものであるだけに、無意味に読み捨てるのは勿体ないと私たちの生きた歴史だからつづつていてよかつたと思う」と語つていた。とくに末松さんは「みいけ」と一緒に「くろだいや」もつづつており、両紙を比較してみていると会社のPRや闘争時の宣伝などもよくはつきりと判り、非常に勉強になるといつている。



「まあ、私は多分にコレクション癖があるのでしよう」といつているが、それでも、時たまこのつづりをパラパラめくつていると、その当時よりも状況がはつきり判り再認識するにはもつてこいだという。

（写真は末松さん）

三川で美術展

力作24点を展示

三川鉱講堂で催された。今回の出品数は二十四点、とくに港務支部の姉川氏の賛助出品して力作を展示している。

三川美術部の推進力となつている美術サークルは、結成以来たゆまず練習をつづけており、例年阿蘇などへスケッチに行き精進をつづけているなど、熱心な美術活動を行つている。こういう努力が美術展の回数を重ねるごとにハツキリと作品自体に滲み出ているのはうれしいことである。

激励の手紙と本

珪肺患者へ仲間の愛情

本紙前前号に〃苦しみと悲しみ〃と題するけい肺患者松崎さん（大谷分会）の手記を掲載したが、その後この手記を読んだ臼井新町の栗さんが松崎さんへ激励の手紙と生長の家の書籍二冊を贈つてきた。見も知らぬ人から温い激励の手紙を受け、なお書籍まで贈つてもらつた松崎さんは涙を流して感激した。早速、栗なる人を探してもらつたが、臼井新町とあるだけで氏名は判らない。ここは本所支部と港務所支部の臼井分会があり、同じ組織の仲間とだけしか判らなかつた。

奇特な人にお礼を

雲が北から走るように流れてゆき、硝子戸をたたくように吹き荒れた風も、いつしかやんで、今朝は雲一つない晴天です。道行く人々はなにか楽しそうにうきうきと中には子供の手を引く楽しい姿を見て、私も思わず良い天気だなあとつぶやく。

看護婦さんが「お手紙です」と二通の手紙を渡された。一通は長女からの元気で頑張つておりますとうれしい便り一通は全々知らない氏名の不明の人からでした。不思議に思つて開いて見ました。「みいけ」を見られて涙とともに読まれたことから、私に元気を出して妻子の許へ帰るように、天地一さいの物と和解し、親に、妻に、子に、先生看護婦さんから付添さんに感謝するようにすれば、元気になると書かれてあり、私は知らぬまに涙が出ていました。ああ俺が悪かつた、俺の我（が）を折るのを奇徳な人が知らせて下さつたのだ。これからは先生、看護婦さん、付添さん、親兄弟、かわいい妻子に感謝する気になりました。二月初めから具合が悪く苦しんでいましたが、今は気分もよく、元気になりつつあります。思えば長い闘苦労と心配をさせ、淋しい目にあわせた妻や子供に感謝し、心でわびました。また私にお手紙とお本を送つて下さつた臼井新町のお方に心から感謝し、お本を拝読しましてかわいい子供の許へ、顔や姿はどうあろうとも私のためにはやさしい日本一の良き妻子の許へ退院することを祈り、心から人間、神の子に病なしとお祈りしております。お手紙とお本を送つて下さつた奇徳なお方に拝顔の上、お礼申上げるべきのところ、入院中勝手ながら「みいけ」の紙上を拝借致しましてお礼申上げます。有難うございました。

三鉱の組合員の皆様、主婦会の皆様、お体をお大切に。

（松崎 国男）

行動隊総会

赤田池で競艇も

四山行動隊では九日の日曜、午前九時隊員四十名が、全員自転車にのつて赤田湖泉向け出発した。

赤田ホテルでは国鉄のオルグを囲んで座談会を行い、とくにオルグに対しては、国鉄労組の現状や新潟闘争以後の問題、第二組合の問題などに質問が浴びせられた。

このあと、役員改選などを行い、とくにさきに誕生した四山コーラスを迎えてうたごえの練習を行い最後に赤田池でボートレースを行い、春闘の決戦を前に、隊員の意思の統一をはかつた。

さあ闘うぞ

張切る地域闘争本部

春闘もいよいよ闘いへ踏切つた。各地域分会では、すでに闘争体制に切替え、各地域闘争本部も店開きして〃さあおいで〃の構えである。

古びた闘争本部の表札を新しくつくり替えたり、室内の整備をしたり、いよいよ長期闘争に備えて闘いは地域の方へと移つていく感じである。港務支部臼井地域分会では三月に入るや、闘争本部の表札は木の香も新しいものとつくりかえて、分会長宅に下げられた。

「春闘に総力を結集」という横断幕さえ張られ、闘いへの自信満々という気構えが流れている。

十三日は第一派の二十四時間ストへ突入した。ちようど雨天のため野外行事はお流れになつたが、各分会では決起大会、闘争機構確立のための役員会議、校区連絡協議会の役員会議などが開かれたが、静かな第一波を迎えた各地域ではどつしりと腰を落ちつけている感じだ。（写真は臼井の闘争本部）